



夏帽子

タデ原湿原木道真直ぐに夏帽子 佐藤 文雄

夏帽もファッションの一つ。最も高級品と言われるのはパナマ帽とか。最近ではわらわら帽もおしゃれに。真っ直ぐに続くタデ原の木道。ここを歩くと誰もが気分爽快。コロナ禍でこんな場所が人気のスポットに。夏帽子は、誰でしょう？

今月の推薦句

一山みんな白梨の袋掛 泉 溪

梨は秋の季語になるが、ここでは「梨の袋掛」で夏の季語になる。「一山みんな白」で軽く切れて、何かと思つたら「梨の袋掛」で納得、句またがりの句が成功です。

ウグイスの地域密着訛りかな 重 吉

鶯は一年中聴くことができますが、一応、春の季語。訛りがあるのかどうか定かではないが、そう感じてしまう作者の愛情が伝わります。ちなみにハワイの鶯は日本に比べて節回しが単純だとか。

ワクチンの列に思案の夏に入る 原田 勝子

「ワクチンの列」とはこれまた見事な省略。今の時期に何の話しなのかすぐ分かります。ワクチン投与の列に並んでいても思案をしようという心情もよく伝わります。思案の夏は早く終わってほしいものです。

俳句の基本 「形容詞」はなるべく使わない

読者俳句

ふるさとの俳人たち

その⑤

熊谷連生坊

熊谷氏は大正十一年（一九二二年）九重町湯坪生まれ。獣医中尉であった氏は敗戦をいन्दネシアのセベレス島で迎え、引き上げ後は飯田高原で獣医の仕事に携わる。飯田中学校ができたあとと教員となり、前号で紹介した穴井太氏に出会うことになる。これが縁となり戸畑から帰省する穴井氏を待つ句会が始まり、時を経て、これが高原句会の原点となる。以後、町の教育委員などの要職を務める傍ら句作に勤しむ。熊谷氏は、昭和五十七年六十歳のとき句集『樋の口』を発刊、およそ十年間の句作の集大成である。この中で太氏の推薦句が紹介され、反響を呼び前衛的俳句の俳人として注目を集める。

早かな蛇口につまる山椒魚

田の畦に砲声響きあやめ咲く

鶏一羽雑炊にせん秋の暮

俳号「連生坊（本名陵蔵）」にまつわる話である。熊谷家には次郎直実の系図があり直実にちなみ太氏が連生坊を名付けたとか。穴井氏との深い繋がりもここでもよくわかる。句集の中から好きな句を紹介する。

霜柱さらさら倒れごめんなさい  
残雪に父より太き足跡を  
一族の数だけ下がるつららかな

佳作 二十席

五月雨残るふたりの保育園 豊 國

限界の村を忘れず軒つばめ 桐 友

ガラス戸の小さき手形つき雨 律 子

伸びやかに命発散南瓜の芽 香 澄

打ちあくる言葉さらりと柚子の花 ヨウ子

夕映えに代田は朱くさざめいて 則 子

短夜やよう慣れて娘にメール 左世美

匂い立つカクテル薔薇の黄の深き 直 人

点滴の音の確かや五月雨 八千子

人混みにミントの香り夏きたる 末 子

苗物を手にして夫の笑顔かな 次 江

両の手で螢をそっと包みけり 純 子

聴き惚れる蛙の合唱吾タクト ヤスコ

絵手紙の誰かに似たり空豆を いづみ

竹の子や器を飾る宵の膳 ムツ子

核家族食い扶持ほどの田を植える 恒 己

薫風や飯田高原すがすがし 良 子

五月雨最後のメール削除かな 好 美

独活味をお裾分けする両隣 千ズ子

鈴蘭の白のはかなと雨に映ゆ トシ子



高原句会当時のメンバー  
前列左が連生坊さん

（選者・評）季語の重なりや字余りなどは添削する場合もあります。ご了承ください。今月は、「梨の袋掛」「鶯の訛り」「ワクチンの列」をいただきました。いずれも写生力と素材の取り扱ひのよさです。発見したことは全部メモする、これは大切ですが、それを全部言わずに読み手（読者）の想像力の委ねるのが俳句独特の作業です。毎月、締めきり後に書く投句が少しございます。何とか間に合せていますが、校正で無理をお願いしていますので、できるだけ早目のご投稿お待ちしています。それではまた七月号をお楽しみに。（りゅうしゅう）

お詫びと訂正 前号の佳作で「真っ赤っか亡夫に見せし洋石櫛」は「洋石櫛」の間違ひでした。お詫びして訂正いたします。

7月号の締め切りは、6月25日（必着）でお願いいたします。選者（古後粒勝）宅にハガキ等で直接送付いただいても結構です。住所（九重町大字栗野1414番地）